Acedia——メランコリーの中世版

大橋博司

ラテン語の acedia はギリシャ語の $\alpha\kappa\eta\delta\iota\alpha$ に由来し、「倦怠」や「憂うつ」に近い状態とされる。英語でも同じく acedia 後には accidie とも言われた。

この術語を一般化したのは Johannes Cassianus (ca. 360—ca. 430) で、彼はスキティアに生まれ、コンスタンティノポリスの総大司教ヨハンネス・クリュソストモスのもとで修行した修道僧である。一〇年余をエジプトの隠遁者とともに生活した後、四一五年モンペリエに自ら修道院を建てている。東方の修道院生活を西方に移植した人物として知られるが、その代表作に『修道士の制度と主要な八つの悪徳の矯正』(De Instituis Coenobiorum et de Octo Principalium Vitiorum Remediis, Libri XII) がある。「七つの大罪」として知られる罪悪は当時は八つあったようで (assianus の定義によれば acedia は「心の倦怠ないし動揺」(tadium sive anxietas cordis) であり、「不安」(inquietudo) の話も用いられている。いずれにせよ、この著者によると、acedia とは修道院の独房で修行する僧侶、砂漠に住まう隠者、その他の宗教的生活のために選ばれた聖職者を襲う病 (または罪) であり、魂の倦怠、救剤への無関心、絶望などをもって彼を襲う。彼らは自分のいま住んでいる所が何か無意味な、無味乾燥の場所だと感じ、いま交わっている人々が無価値な者に思われる。別の所へ行けばもっと良い場所があり、もっと良い人に会えるのではないかと夢想する。acedia に襲われると、精神的運動はすべて麻痺し、遠くへ旅立ちたいというやみがたい欲望にかられる。興味あることに、自分の本業である宗教的生活以外のことには何でも興味がもてるのだという。そしてこの状態は——現代のうつ病の日内変動のように——きまって真昼に襲うことが多い。旧訳聖書の詩篇九一にある「真昼に荒らす滅び」が精神的緊張を麻痺させ、不可抗力的な不安と焦躁とに陥らせるのである。

この acedia を救うためには、同僚の慰め、眠りによる慰め、あるいは作業による精神的集中などが推められてい

る。Cassianus 自身、砂漠の修道院における長年の体験と観察があるだけに、この状態の訳述は精神医学的にみても大変に貴重なものであろう。

acedia と tristitia とは Cassianus においては明確に分離されていたが、その後両者の区別は次第に不分明となり、一つのものとされていく（聖グレゴリウス、イシドロスなど）。その過程の詳細については Alphandéry や Altschule の研究がある。英語での accidia は文人チョーサーの頃までは日常語だったが、その後は死語同然となってしまった。ただイタリア・ルネサンス初期の詩人ペトラルカは、自らが本来の意味――すなわち宗教的罪悪――とは異なった意味で、自己のメランコリックな体験を accdia と記し、これをゲーテ流の Weltschmerz と同化している。

中世の医学におけるメランコリア概念は、ヒッポクラテス、ガレノスの概念を継承する「黒胆汁」説で、全く生物学的な説明原理に依っていたけれども、ここに述べた accdia は中世キリスト教世界におけるメランコリアに関する潮流の、いかにも中世的な副主題をなしていたと言えよう。

（京都大学精神医学）

資料を通して見た平安時代の医学の社会的側面について

MACÉ・美枝子

本発表は平安時代の医学の社会的側面を分析することを目的とし、疫病及び飢饉発生時の政治社会的処置を比較して先ず疫病がどのような社会的認識を受け、その処置にどんな特色があるかを分析した。用いた資料は、六国史・類聚国史・日本紀略・扶桑略記・本朝世紀・百錬抄・類聚符宣抄・本朝文粋・小右記・中右記・玉葉が主である。演者が調べ得た限り、疫病については全国規模六八回、非全国二二回の計九〇回、処置は奉幣・攘・読経・御霊会等呪術宗教力に頼るもの六〇回（全国四六回、地方一四回）、食糧・銭の賑給三三回（全国二二回、地方一一回）、処置無一六回（全国一四回、地方二回）、免税あるいは納税延期処置一一回（全国一〇回、地方一回）、同じく大赦一一回（全国一一回、地方〇）、最後に医薬配給・医療等医学的処置七回（全国七回、地方〇）と